



こごみ日和

～みんなでごみゼロ～

No.49 2011.秋

凧靴漂う。～手仕事が生まれる場所を訪ねて～

靴を扱うが靴は売らない。暖簾には「靴修理」の文字が掲げられるが、その仕事ぶりは私たちが持っているある種の修理のイメージを超えている。京都三条会商店街に店を構える「凧靴」の若き店主「森 裕佑の仕事」を通して、ものを大切にする文化を考えてみたい。

森の仕事は靴のお世話をする。シューズ・ケアセンターとも呼んでみたい。

靴の修理、お手入れを基本としていて、どんな靴でも引き受ける。ただし、靴の状態や素材によっては、修理できないものもあるので、お客様と話し合っ決めていく。

森は続ける。「靴は10年、20年と履くもの。くたびれる前に、日々、手入れをしてあげることが必要なのです。そのことはお客様にもお伝えします。お客様にも出来ることがあると。そうすることで靴の生命力が甦ると共に、お客様の心の中に愛着が芽生えてくるのです。」

そうすると歩くことも楽しくなる。お馴染みの靴で街を歩くと今までと違った爽やかさまでもが戻ってくる。そう思うのです。」

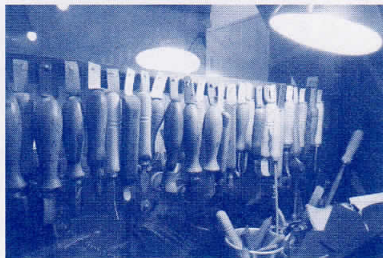


— なるほど。「歩くまち京都」にはよく手入れされた靴で歩くのがお似合いかもしれない。足元の綺麗な姿も「歩くまち京都」の風景の一部なのだ気づかされる。

「言うまでもないことですが革は生きています。だから手入れをしなかったらカスカスになる。そこで栄養を与えてあげる。植物に水をあげるように。今、その生き物感覚が失われているのではないのでしょうか？」

大切に育ててあげれば靴のほうも長く付合ってくれる。「もの」への愛が大切ということだろう。

森はとても「手仕事」



を大切にしている。手仕事のぬくもりが顧客に伝わる。すると顧客との対話もはずむ。それがうれしい。仕事甲斐につながる。

「私は京都にお手入れの文化が再び根付いて欲しいと願っています。」

さて、ちょっと貴重な、修理を説明する時に使う靴の断面を切り取った「見本」を見せてくれた。底の部分は革、コルク、革と重ね合わせられている。

「この靴は修理されることを前提として作られています。修理が困難な一体成型ではなく、作り手が修理されるための設計を織り込んでいる訳です。だから私のような修理専門の仕事人はとてもうれしいし、人から人へと思いが伝わっていく。時間を経て価値が伝えられる。素敵なことだと思います。」

最後に森は修理の様子を見せてくれた。手に馴染むシンプルな修理道具が、まるで彼の手の一部のように働く。

見渡せば商品棚の温かみ。並べられたシューキーパーの木のぬくもり。修理の仕事を楽しむことを表現する彼のいでたち。玄関先の自転車。そしてハンマーの音。すべてに凧靴の香りが漂う。

— 取材を終え、命が甦る現場を出て街に繰り出した。この町に手仕事の音が優しく響く日が必ずやってくる。それはなつかしい風景であると同時に「未来」とも呼ぶのであろう。

靴修理「凧靴」 <http://kyoto-rinka.com/> (075-821-2605)

取材：大橋 正明

微笑みの大地

みんなのヴィジョン創造研究所 代表 大橋 正明

天は大地に恵みを与えた。

「穀物や果物が豊富で地上の楽園のごとく、人々は自由な生活を楽しみ東洋の平和郷というべきだ。」

「美しさ、勤勉、安楽さに満ちた魅惑的な地域。」

「鋤(すき)で耕したというより鉛筆で描いたような風景。」

この風景の描写はイザベラ・バードが記した「日本奥地紀行」に詳しい。

彼女が微笑みの大地と称したその地は東北地方のことである。

時に1992年、東北・山形新幹線の開業を祝ってJR東日本は華々しく観光キャンペーンを展開した。

東北の美しい大地と素朴な地元の人々がテレビコマーシャルに映し出されるや、見る者を魅了した。

キャッチフレーズは「その先の日本へ。」

後に名文句として人々の記憶に刻まれていく。

しかし、この1992年以降バブルが崩壊。その先の日本を問いなおすこともなく、

我が国は失われた20年へとさまよいつづけることになったのである。

陰りをみせる高度消費社会の中でおお、資源の獲得競争、歯止めのかからぬ過剰消費、そしてごみ問題、さらには労働疎外や人々のストレスの増大、コミュニティのゆがみと数えきれない負の連鎖を繰り返しながらアクセルを踏み続けたこの社会に亀裂が入る。

気仙沼の漁師が言った。

「俺は高台には移れねえ。漁師が陸に上がったなら誰が海を見てやるんだい。」

この言葉を心の奥深いところで感じてみよう。

さて、衆縁和合(しゅえんわごう)という言葉がある。

どれひとつとして自立して存在するものはない。

すべては依存しあい、協力しながら仲良く暮らすという意味あいである。

戦後、私たちは何を失ったのか。また、失ってはならないものは何なのか。

そこをじっくりと問うことに時間をかけてみよう。

きっと思いやりに満ちた新時代の幕開けが待っている。困難をも分かちあう人間復興の社会が待っている。

この微笑みの大地、東北を思いながら、日本も日本人も歩み始めようではないか。

今度こそ、「その先の日本へ。」



ここに2枚の写真を掲載した。1枚は多くの犠牲者を出した石巻の川の中州に建つ石ノ森萬画館。内部は破損したものの、外観は形を留めてくれた。子どもたちの夢は生き続ける。

もう1枚は避難所の片隅で見つけた子どもたちの絵である。モノクロでわかりづらいが心の不安が痛々しいほどに表現されている。因みに東北は子を神童とあがめ、守り育てる国でもある。

『ワクワクする、僕らの街を創ろう！』

取材：同志社女子大学現代社会学部
現代こども学科教授 上田 信行さん
上田ゼミ3回生の皆さん
聞き手：みんなのヴィジョン創造研究所
代表 大橋 正明さん

現代こども学科とは、どのような研究をしているのだろうか？そんな素朴な疑問と新たな出会いに胸を膨らませながら、同志社女子大学・京田辺キャンパスの一教室に入った。

広いフローリングの教室は、スポットライトが配置され、アートスタジオのような、クリエイティブな空間で、空気が入った風船や作りかけのブロック、人気キャラクターのぬいぐるみなどが棚の上で我々を出迎えてくれた。若い世代を交えた取材に、私たちの期待も高まる。

上田：僕たちの研究と「地域創り」との関連性や接点は、結構あるんじゃないかなと思います。僕たちは日々、自分の可能性を最大限に発揮でき、一人ひとりが本気でワクワクできる学習環境デザインの研究に



上田教授

取り組んでいます。言い換えれば、人間関係や社会をより良くするためのデザイン研究だと言えます。だから、地域社会との繋がりを考えることはとっても大切。「地域創りは誰かがするものじゃない、私たちが創るんだ！」と一人ひとりが考え行動する、そういう時代が必ず来る。これまでは、何でも国がやってくれた、しかしこれからは自分たちの手で街づくりを、地域創りを行うことが非常に重要になると考えています。

大橋：「自分たちの手で、自分たちの街を創る」。そのアイデアは、私たちと皆さんとの間にあるんじゃないかと思っています。対話を通して、言葉として明確なものになってくる。そういう意味でも、言葉を選んでいく作業は大切なプロセスだと考えています。

上田：僕たちも、言葉（概念）を通して考えることをとても大事にしています。言葉の使い方や捉え方ひとつで、ネガティブシンキング（マイナス思考）をポジティブシンキング（プラス思考）に変換することができるんです。例えば、同じ課題を与えられても、こんなに難しいことを僕はできるだろうか？と消極的に考える人と、どうやったらできるだろうか？と前向きに考え、取り組む人では、思考パターンや行動力、更には結果まで違ってきます。捉え方を少し変えることで、「こんな難

しいことはできない」という思い込みを、前向きに解決できるようになるんです。マイナスをプラスに変換する、このような考え方があるんだ、ということも多くの方に知ってもらいたい。大事だし、僕らはそれを具体的に伝えていきたい。

大橋：もう一つ、現在の社会を形作るものとして「設計図」の存在が挙げられます。マニュアルと言ってもいい。日本はものづくり立国として世界をリードしてきましたが、設計図が溢れている。現在はそれに頼り過ぎて、発想力、応用力が乏しく、設計図以上のことができない、また、しなくてもいい社会になっているように思います。その点を皆さんはどう感じていらっしゃるんですか？

学生：おばあちゃんの作る家庭料理には、レシピがありません。でも、感覚で味付けされた料理はとっても美味しいんです。経験があるから、レシピなんて必要ないんですね。

学生：「設計図」があれば、それを作るための時間はかからないけれども、その過程を楽しんだり、工夫したりすることができないですね。

学生：それに、社会がどんどん「効率化」を重視するようになって、それ以外のことには価値がないとされているように感じます。これが、コミュニティー（地域社会）の希薄化にも影響していると思います。

上田：僕たちは、答えを求め過ぎる教育を長く受けてきました。真の教育とは、なぜ？どうして？という疑問を持ち、常識に捉われず、想像力を羽ばたかせて熟考する、その過程が何より大切で、そこに本当の楽しさがあるのだと信じています。正しいと思うことは自分の中にある、自分の意見が言えることが一番重要。想像力こそが、社会を変える原動力になるし、行動力にも繋がっていきます。

人が何かにワクワクしながら夢中になる、そんな「プレイフル」な心の状態が、新しい社会を築い

シリーズ

「みんなで考える」



上田ゼミの様子

ていくんです！

「プレイフル」というのは、「憧れ」に向かって本気で関わっているときの、あのワクワクドキドキする心の状態。

プレイフルだと、学びとる力が大きく、明日の自分は今日の自分よりも確実に進歩する。

考えたことを直ぐ誰かに伝えて、他の人と考えをシェアして、あれこれ試しながら実行する。

シェアすることで、自分だけでは生み出せないものを作り出すことができる！

この積み重ねが、社会をこんな風に良くしたい、という気持ちを育てることに繋がっていると思います。

学生：私は、子どもたちと一緒に創りながら遊べる、そんな遊具を公園に増やしたいと思っています。私たちがデザインしたものを、子どもたちがまた自由にデザインしていく…。私たちもワクワクできる公園がたくさんできると嬉しいです。

学生：子どもたちが関わることで、地域が繋がりやすくなると思うので、子どもを通して、コミュニティの結束力を高めていきたいですね。

大橋：地域の「子どもたちのために」、まさにプレイフルな発想ですね！

上田：豊かな地域社会を創るためには、大人も子どもも夢中になれる場所や心から楽しめること、つまり生き甲斐が必要で、そのためには専門家の存在も欠かせません。

僕は今、「スロームーブメント」や「スローライフ」という考え方にも興味があります。

それらの意味するところは、「何を一番大事にして生きるか」ということ。自分の生活に不可欠なことに優先順位を付けて、全てを求めすぎない。一度、皆さんの「価値観」についてもポジティブに疑ってみて欲しいんです。「自分はどうした

らいいの？」ではなく、「自分はどうしたいの？」と。

自分にとって本当に大切なことを選びながら生きていくと、きっと周りの環境にも無関心ではいられなくなると思います。そんな気付きや心遣いが、社会を良くする大きな力になると信じています。

上田ゼミで過ごした時間はあっという間だったが、夢の詰まったお話には、街づくりのヒントが溢れていた。最後に本取材を通して心に残った言葉を。「聞いたこと、感じたことを誰かに伝えないと本物にはならない」「よい言葉は伝染するんですよ」



一回生対象のゼミでのワークショップの様子。

Remix がテーマ！イメージを膨らませて、モンスターを描く。

一人で1枚を仕上げるのではなく、三つ折した紙に、頭部・胴体・下半身を、3名で交換しながら描く。他の人とシェアすることによって、自分だけでは生み出せない、“自分の枠を超えた”モンスターを作り出すことができる。

取材日：平成23年7月21日
取材：松村 香代子

エコ学区として更に発展！

～有隣ごみ減量推進会議～

「お暑い中、おおきに。」毎月11日の午前10時から、元有隣小学校の正門では、ビールびんや蛍光灯などの資源物回収が行われています。木陰に長椅子を置き、有隣ごみ減量推進会議（以下、有隣ごみ減）の大田垣会長をはじめ、副会長の国友さん（保健協議会会長）、山田さん（地域女性会会長）が地域の方を笑顔で迎えます。蛍光灯や

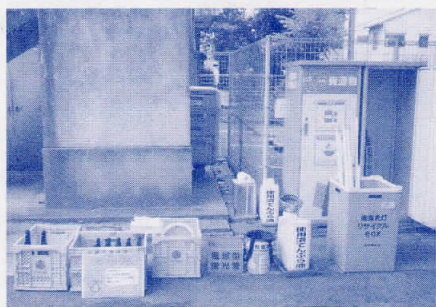


右から、大田垣会長、国友副会長、山田副会長。

てんぷら油、乾電池などが次々と集まります。「この電球やけど、回収できるの?」「これは電球の形してるけど、中がフィラメントやなくて蛍光灯やから回収できますよ。」「今月からボタン電池も回収できるようになりましたよ。」など、資源物を通して地域の方々の会話に余念がありません。山田さんは、「家庭から出る不用品の中には、どのように処分をしたらいいのか分からないものが結構あります。『壊れた電気カミソリがあるけど、使用済小型家電*1として出せるの?』など、疑問の声を聞いた時は、下京エコまちステーションに連絡をして、ごみの出し方を教えてもらっています。」と、積極的に行政との連携も図っています。家庭の声が行政に、行政の取組が地域へと広がる毎月11日の資源物回収は、情報共有・情報発信の場でもあるのです。

「家庭から出るごみを減らすためには、女性の協力が不可欠です。資源物の回収に、女性会の皆さんが参加してくれることは大きな原動力となっています。」と大田垣会長。また、各町内の保健委員の皆さんも輪番制で回収を手伝ってくれています。地域一丸となって、資源物を活かそうという意識が高まっています。

有隣ごみ減では、午前10時から12時と午後7時から8時30分に資源物の回収を行っています。「昼間にお勤めの方が利用しやすいように」と、夜も保健委員の方が詰めておられます。



今年の4月からは「下京ごみ減量ポイントカード」を導入し、資源物を持って来た方に毎月にスタンプを押し、ポイントを集めてもらうという楽しみも増えました。



ポイントカードの採用により、回収に協力してくれた方が明確になり、大田垣会長も驚く結果が見えてきました。「これまでは、毎回同じ方が回収に協力してくれていると思っていたんですが、新しい方が随分と協力してくださっていることがわかりました。それも月を追うごとに増えており、資源物回収の環が広がっていることを実感します。元学区の小学校を活かし、地域に根差した資源物回収拠点を設けることが出来るのは幸いですね。」取材中にも、20代前半の方が蛍光灯を持って来てくれました。マンションの掲示板を見て、今日の回収のことを知ったそうです。この取組も4年目を迎え、マンション世帯や若い世代にも徐々に認知されてきたことが伺えます。

大田垣会長の今後の目標は、毎年8月に有隣学区を挙げて行われる有隣まつりを「エコ有隣まつり」に発展させること。屋台ではリユース食器を導入し、参加者には自分のタッパーやお箸の持参を呼び掛けます。また、おまつり会場でも資源物の回収を呼び掛けたり、ごみの分別回収を実施したりと、具体的な啓発活動を行う予定です。更に節電の観点から、会場を飾る提灯もLEDにできたらいいねえ、とアイデアは尽きません。

この7月に、京都市により「エコ学区*2」に指定された有隣学区。日頃から、地域ぐるみの活動が盛んで、人と人との温かい繋がりが有隣の魅力です。クラブやサークル活動、子育てサロンや高齢者サロンなどを通して培われた絆が、環境活動を支える礎（いしずえ）になっているのです。

*1 現在、京都市では使用済小型家電の回収にも取組んでいます。市内50カ所に回収ボックスを設置し、携帯電話や電気カミソリなど34品目（縦×横の大きさが15×25cm以下のものを対象）の回収を実施しています。

詳しくは、環境政策局 循環型社会推進部 循環企画課
電話 213-4930、又は「京都市 小型家電」で検索ください。
<http://www.city.kyoto.lg.jp/kankyo/soshiki/5-5-0-0-44.html>

*2 エコ学区…低炭素社会実現に向け、2年間（平成25年3月まで）にわたり「省エネ学習事業」と「地域実験事業」等の地域独自の先進的な省エネの取組を実践していただく「学区」又は「学区の連合体」で京都市が認定したものを指します。

取材日：平成23年8月6日、8月11日

取材：松村 香代子

きもちのよい季節になりました！エコイベントにぜひご参加ください！！



未来フェスタ京都

～科学×エコ～

10月10日(祝) in 京エコロジーセンター

KyotoRadioDay2011 ラジオの生中継や、かえっこバザール、働く車も大集合！自転車ワークショップ、まんがワークショップも開催します。詳細は、ゴミゲンネットにて



3R推進全国大会

～ひとりひとりが行動するエコ～

10月28日(金)～30日(日) in みやこメッセ

エコ活動のネタを仕入れに！刺激を受けに！是非足を運んでください～！！

そして、ごみ減量推進会議の活動を全国にアピールしましょう！詳細は、ゴミゲンネットのトップページの右下のリンクから

市民公募型パートナーシップ事業 採択団体が決まりました。

Ladies' Eco Circle “プラムロード”

小学生とともにエコについて学ぶ学習会の企画・運営や、学校でのごみ分別プロジェクトの実施、さらにコミュニティ回収の紹介やごみの行先紹介など、小学校と地域に根差した様々な活動を通して、地域からごみ減量活動を推し進める取組。

京都市立伏見板橋小学校PTA

伏見板橋小学校を中心に、地域の祭りやイベントでのリユース食器利用のインフラ整備を行う。また、環境・ごみ減量を体験できる秋まつりを実施する。

「体操服！いつてらっしゃい、おかえりなさい」プロジェクト実行委員会

子どもたちが着る体操服をごみにしないため、小中学校や保護者向けに、体操服のリユースやリサイクルについて紹介する啓発ツールを製作する。啓発ツール内では、どうしても着ることができなくなった体操服をリサイクルする仕組みについて紹介し、PRを行う。

北区地域ごみ減量推進会議

ごみ減量について三世代に伝承していくため、各世代が集い、交流することができる「北区ECOまつり」を開催する。イベントでは、リユース食器の体験や、これまで北区地域ごみ減量推進会議が行ってきた様々な取組紹介などを行い、地域におけるごみ減量の取組を確かなものとしていく。



3R・低炭素社会検定実行委員会

災害廃棄物やそれらへの対応から浮き彫りになる現在の「3R」の課題や今後の在り方を、市民目線で記録し、考え、今後の行動指針を模索する。このために、被災地訪問を実施し、市民向け報告会を開催する。さらに、課題を洗い出し、この課題の解決策を検討するワークショップを開催する。これらの内容を紙芝居等にまとめ、今後も活用できるツールを製作する。

静原小学校学校運営協議会

静原地域の清掃活動を通し、ごみの現状を自治会便り、学校便りなどで地域住民に周知する。合わせて間伐材を利用したプランターを製作し静原地域をコスモスで満たす取組。

NPO 法人地球環境デザイン研究所 ecotone

イベントなどの非日常的な場でのごみ減量として、長年行ってきたリユース食器の取組を、日常生活の中でのごみ減量に結びつけていくためのキャンペーンを開催し、そのための啓発ツール等を製作する。



びっくり！エコ実行委員会

東北の被災地と京都の子どもたちが、一つの絵巻物にそれぞれエコ（特にごみ減量）をテーマにした絵を描くワークショップを行う。自転車で東北と京都をつなぎ、絵巻物と子どもたちの想いを運ぶ。子どもとエコの力を集結・発信することで、日本を元気づける取組。

一般社団法人蛍光管リサイクル協会

蛍光管の適正処理・再資源化のための情報提供・啓発活動、行政、地域団体や事業団体との協働の取組の連絡調整などを行う。これにより、適正処理の仕組みを継続的にいける仕組みを作り上げることに寄与する。

事務局より

今号が49号ということは、次号は50号！特別記念号を予定しております。京都市ごみ減量推進会議が発足して15年。京都市のごみ半減まで、もっともっと皆さんと力を合わせて2R&ごみ減量に取り組んでいきたいと思えます。

京都市ごみ減量推進会議会報誌 ごごみ日和 No.49

〒612-0031 京都市伏見区深草池ノ内町13
京エコロジーセンター活動支援室内
TEL:075-647-3444/FAX:075-641-2971
E-mail: gomigen@mbox.kyoto-inet.or.jp
URL: <http://web.kyoto-inet.or.jp/org/gomigen/index.html>

🔍 ゴミゲン ネット

🔍 検索 で検索出来ます

【入会のご案内】

京都市ごみ減量推進会議は、京都市のごみを減らし、環境を大切にしたいと暮らしの実現に寄与することを目的として、市民団体、事業者、行政により1996年11月に設立した団体です。パートナーシップで多彩な活動を展開中。京都市ごみ減量推進会議では、ともに活動をする会員を募っています。

詳細は、事務局へお問い合わせください。TEL: 075-647-3444

企画編集:京都市ごみ減量推進会議 普及啓発実行委員会
(会報誌:ホームページ小委員会)

